



TITLE:

マルクスにおける貨幣と時間(上)

AUTHOR(S):

八木, 紀一郎

CITATION:

八木, 紀一郎. マルクスにおける貨幣と時間(上). 経済論叢 1986, 137(6): 541-556

ISSUE DATE:

1986-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/134153>

RIGHT:

經濟論叢

第137卷 第6号

マルクスにおける貨幣と時間（上）……………	八 木 紀一郎	1
『資本論』第2巻第3篇「社会的総資本の再生産と流通」における外国貿易捨象の命題について（上）……………	板 木 雅 彦	17
イギリス東インド会社と在インドのイギリス人私商人……………	今 田 秀 作	32
トヨタ自工の工場展開……………	塩 地 洋	56
19世紀中葉期イギリスのファーニスにおける鉄道建設と鉄鉱山業……………	阿知羅 隆 雄	83

昭和61年 6 月

京 都 大 學 經 濟 學 會

マルクスにおける貨幣と時間 (上)

八 木 紀 一 郎

目 次

- I はじめに——〈資本と時間〉と〈貨幣と時間〉
- II 流通過程の時間的構造と貨幣（以上本号）
- III 流通過程の費用

I はじめに——〈資本と時間〉と〈貨幣と時間〉

ケネー、チュルゴ、スミス以来このかた、〈資本による生産〉という近代の経済の体制的認識は、経済過程の時間的構造の認識に結びついていた。資本の循環・回転論を想起すればわかるように、このことは、マルクスの経済理論の理解においても一つの枢要点をなすものである。私はそのように考え、〈マルクスにおける資本と時間〉というべきテーマのもとに、これまでいくつかの論考を公表してきた。そのなかで気がついたことは、マルクスにおける〈資本と時間〉という問題構成には、一方ではそれに先行するとともに、他方では資本概念の展開とともに発展する〈貨幣と時間〉といういま一つの問題構成が結びついている、ということであった。まずはじめにこのことについて、経済学史を展望しながら簡単に説明し、〈マルクスにおける貨幣と時間〉を論じる本稿の位置を確認しておくことにしたい。

〈資本と時間〉という問題構成は、現在では、生産における諸要素の投入の時間的構造というベーム・バヴェルク的な形で把握されることが多い。たとえば、資本理論の現状の標準的な説明を与えることを目的としたある論文²⁾は、

-
- 1) 「マルクスと賃金基金」『岡山大学経済学会雑誌』13-4 (1982), 「マルクスにおける資本と時間(I)」『同』14-2 (1982), 「マルクスにおける資本と時間(II)」『同』16-2 (1984)。
 - 2) 荒瀬治郎「資本理論」『経済学大辞典(第二版) I』東洋経済新報社 1980年, 438頁。

そのような投入―産出の時間構造を基軸として資本理論を整理し、「資本財の存在が生産および所得分配の問題に対してもつ意義を明らかにすること」を「資本理論の課題」としている。

しかし、こうした見方は、経済過程における〈時間〉の問題を生産技術の問題に還元してしまっており、近代の経済体制の認識という点からみれば、アダム・スミスに比べても後退している。というのは、スミスにおける生産に先立つストックとしての資本の概念は、1)ただ単に技術的・自然的意味で生産に時間がかかるというだけでなく、2)発達した社会的分業のもとでは、流通（販売・購買）が独自の過程となり、それにも時間がかかる、という認識に基礎づけられていたからである³⁾。資本を「資本財」とみる見方は、1)の意味での「時間」しか念頭においていない。しかし、資本がたんなる素材的なストックの集積ではなく、価値的な運動体となるのは2)の過程を介してなのである。商品形態での資本、また、貨幣形態での資本が問題になるのは、この流通過程においてなのであり、ここにおいて〈貨幣と時間〉という問題が登場するのである。

スミスを含めて古典派の経済学者達は、こうした認識（流通自体が独自の時間的過程であるという認識）に含まれる端緒を発展させることができなかった。〈生産および販売に要する期間中に生産的労働を支えるストック〉というかれらの資本概念は、十分に循環論的な彫琢を受けておらず、その構図は〈生産から消費へ〉という常識的な把握と未分化であった。かれらの考察する流通過程は、生産された生産物（商品）の販売＝購買にすぎず、基本的には、生産過程の延長でしかなかったから、かれらにとっては、その期間が生産過程によるものであっても、流通過程によるものであってもたいした差異はなかったのだ

3) 「分業が行きわたるようになると……欲望の大部分は他の人々の労働の生産物によって満たされるようになる。かれはこれを、かれ自身の労働の生産物で、または同じことであるが、その生産物の価格で、購買することになる。しかしこの購買は、かれのこの労働の生産物が、ただ仕上がったというだけでなく、それが売られたのちにはじめて可能となるのである。それゆえ、少なくとも右の二つのことがなしとげられるまで、かれを扶養し、かれにその作業の材料と道具を供給するのに十分なだけのさまざまな種類の財貨のストックがどこかに貯えられていなければならない。」大河内一男監訳『国富論』（中公文庫）① 419-20頁。

ろう。かれらにあっては、流通過程の独自性が、そしてまた、流通過程がたんに生産物の価値および使用価値の実現としてあるだけでなく、貨幣資本による生産要素の購買＝支配としても存在することが忘れられたのである。バーム・パヴェルクの「オーストリア学派資本理論」が古典派の資本理論を継承したというのは、そうした切り縮められた意味においてなのである。

〈資本と時間〉という問題が、このように「生産過程の時間的構造」に結びつく傾向があったとすれば、〈貨幣と時間〉という問題構成が、「流通過程の時間的構造」に結びつくことに不思議はない。それは、もっとも単純な形態においては、貨幣の流通速度という概念を介して価格水準と貨幣の存在量を結びつける貨幣数量説と結合したのである。しかし、流通過程における時間は、相互に独立した主体どうしのあいだで進行するものであり、生産過程での技術的プロセスのように確定したものではない。〈貨幣と時間〉という問題がそうした貨幣数量説の想定するような単純な関連にとどまらないことは、ケインズが彼自身の「逃れるための苦闘」を通じて明らかにしたことである。貨幣は時間をこえて価値を保蔵する手段であることによって、独自の需要と供給の構造をもつのであり、また、契約がそれにおいておこなわれる基準として「現在と将来を結ぶリンク」となるのである。ケインズによって提出されたこれらの論点は、「流通過程の時間的構造」を、「流通過程」の背後にある貨幣的資産、また「流通過程」を支配している観念的動因をも含めて立体的にとらえるべきことを示唆していると思われる。私達からみて必要なことは、そのような把握を〈資本と時間〉というパースペクティヴに結合することであろう。

こうした〈資本と時間〉および〈貨幣と時間〉という問題を背後においてマルクス『資本論』を読むと、どういうことがみえてくるであろうか。

第一に、〈資本と時間〉という問題圏についていえることは、マルクスが、生産資本循環のみならず、貨幣資本循環、商品資本循環を配した資本の三循環を構定し、生産期間と流通期間を区分したうえで資本回転論にとりかかっているのは、きわめて周到であるということである。こうした準備の上で提示され

る回転は、生産過程にある資本と流通過程にある資本をその相互の対抗および依存関係において示すことになるのである。

たとえば、すでに検討したように、個別の工場主はたしかに、生産を連続的・並行的に編成するならば、資本の貨幣形態での保有を極小化できよう。しかし、流通過程が存在するかぎり、そこには製品在庫という商品形態の資本が残存する。この商品形態の資本の存在は、それに買い向かう貨幣の出現を要請するものである。したがって、もし、工場主が彼の資本を遊休させるこの部分をも消滅させようとするならば、流通過程における貨幣そのものの化身というべき商業資本（ $G-W-G'$ ）が彼の取引相手として立ち現れることになる。それは、各段階において姿を変え（変態）ながら、価値（貨幣）としては同一であるという、資本そのものに内在する観念的な二重性を、生産＝産業資本と流通＝商業資本という現実的な二重性にまで進展させるのである⁴。

だが、あまり先走りすべきでないだろう。このような資本の観念的・現実的の二重化は、〈貨幣と時間〉という問題圏をまずは十分立体的に把握したうえで論じるべきものかもしれないからである。「流通過程の時間的構造」という視点をいれて再読するならば、ともすれば教義学的に解釈されがちなマルクス貨幣論も、運動のモメンタムを帯びてくるように思われる。それが一見ステイックな形で叙述されているのは、それが資本運動を論じる前に、いわば「序論」あるいは「形態論」として提示されるにすぎないからである。これが、第二点である。

本稿は、この第二点、つまり、〈貨幣と時間〉という問題圏のマルクスのあらわれにあてられる。そこでは、まず前半において、マルクスにおいて、貨幣が流通の時間的構造を体现するものとして捉えられていることを確認する。そして、後半において、それを経済理論的に、流通費用、とりわけ「貨幣」費用の問題として考察する。そのことによって、〈資本と時間〉というプロブレマ

4) 十分な展開ではないが、「資本における所有・序説」『経済論叢』137-3 (1986) を参照されたい。

ーティクに不可欠な、資本の二重化の展開の環境になると同時にそれより変貌を遂げる通貨・金融機構と流通機構を捉える枠組みを獲得することが目標とされている。

しかし、マルクスの視点としてもっとも重要なのは、やはり、〈資本と時間〉および〈貨幣と時間〉という二つの問題圏の結合の仕方ではないだろうか。これが第三に気づく点であり、私は、「貨幣の資本への転化」といわれる問題の真の意義は、ここにあるのではないかと考えている。古典派の資本理論と比較した場合、マルクスの資本理論における貨幣資本の主導性については疑いのないところであるが、この貨幣形態の資本は、生産要素を購買＝支配して新しい循環を開始する形態であると同時に、価値増殖の成果を総括して循環を停止したり、あるいは別の運動に移ることの可能な形態なのである。したがって、貨幣形態の資本において、価値増殖の利害関心に支配された資本の時間的パースペクティヴと、それ自体としては不生産的な貨幣の時間的パースペクティヴが交錯するのである。これはすでに指摘したように「資本における所有」の発展の動因であるが、その具体的理論的展開は、続稿の課題である。

II 流通過程の時間的構造と貨幣

A) 貨幣の成立と交換過程

流通過程の時間的構造ということは、従来のマルクス経済学においては、かならずしも真面目な検討を受けていないテーマというべきであろう。それは、信用論や、商業資本論において基礎的な前提として問題にはされたが、貨幣論そのものの核心をなす問題としてはとらえられてこなかった。理論家達の関心は、貨幣の成立を論じるさいにも、時間のはいる現実的な交換過程論よりも、むしろ無時間的な概念展開を示す価値形態論の方に集中してきたように思える。

しかし、それはマルクスの価値論の理解としても問題ではないだろうか。マルクスの価値論は、現実の交換とはなれた抽象的な価値を問題としているのではなく、商品生産(市民的生産様式)が独自の現実的過程としての交換＝流通

過程を必要とし、そこにおいて貨幣を媒介とした独自の社会関係がうみだされることを論じているのである。この点は、本稿の問題視角を理解してもらう上で肝要と考えられるので、再度スミスをひきあいに出して確認しておきたい。

というのは、マルクスの価値論といわれるもの——正確に言えば商品論である——は、スミス流の分業にもとづく価値論を批判的に組替えたものであるが、そこにおいては、スミスにおいて超体制的に直接に投下労働の比較として論じられたものが、「商品同士の過程的連関」として論じられているのである。『経済学批判』『商品論』の総括ともいべき次の文章は、それを明確に証言するものである。

「商品世界では、発展した分業が前提されている。あるいはむしろ、発展した分業が、特定の諸商品として対立しあい、しかも同様に多様に多様な労働様式を含んでいる諸使用価値の多様さという形で、直接に表示されている。あらゆる特定の生産的な仕事の様式の総体としての分業は、使用価値を生産する労働として、その素材の面から観察された社会的労働の全姿態である。しかしこういうものとしての分業は、商品という立場からすれば、また交換過程の内部では、ただその結果のなかにだけ、諸商品そのものを特定のものにすることのうちにだけ、実在している。

諸商品の交換は、社会的な素材転換、つまり私的個人の特定の生産物の交換が、同時に個々人がこの素材転換のなかでとりむすぶ一定の社会的生産諸関係の創出でもあるような過程である。商品同士の過程的な関連は、一般的等価物のさまざまな諸規定となって結晶し、こうして交換過程は、同時に貨幣の形成過程でもある。さまざまな過程のひとつの流れとして表示されるこの過程の全体が、流通である。」⁹⁾

この文章でいわれていることは、1) 分業＝社会的労働の相互関連は、交換過程の内部での商品の相互関連の中に結果としてあらわれる以外にない、したがってまた、2) 交換過程は、独立した個々人が商品所有者としてはいりこむ

5) 武田隆夫他訳『経済学批判』岩波文庫、56頁。

社会的過程であり、それは貨幣を生みださずにはおかない、という2点である。それを現代的にいえば、こういうことになる。事前の調整・合意を経ずにおこなわれる商品生産社会では、生産物の配分は独立した商品所有者相互の取引としておこなわれるが、それは時間もコストともなう不確実な過程であり、それが貨幣を生みだすのである、と。

これは、もちろん、整合的で一般的な価値表現の形態を論じた価値形態論の意義を否定するものではない。しかし、商品の交換に時間もコストもかからないとすれば、連鎖的な交換を可能にするような整合性（推移性）が多様な価値表現間に成り立ちさえすればよい⁶⁾のであって、排他的に1商品が一般的等価形態にならなければならない必然性は存在しないであろう。便宜的に1商品を尺度として相対価格を表示するという、ワルラス流のニューメレールであって、いっこうに差支えないはずである。

交換過程における貨幣生成の背景には、商品生産のもつ本質的な無政府性がある。生産の無政府性は、それに起因する社会的なロスを経過過程に転化するのであって、各個人にとって、流通の不確実性、危険としてあらわれるもののかなりの部分はこれに起因している。したがって、諸個人は時間もコストもかかる流通過程において、諸個人の目的の達成を促進する（価値尺度として情報的にも、また流通手段として現実的にも）手段を求めながらも、同時に、常に残存する危険性に対してもそれ自体が資産（価値保蔵手段）として価値を防御する手段を貨幣として求めるのである。

B) 「第一次的総体としての流通」

マルクスによれば、「交換過程」の総体が「流通過程」を形成するが、もし、貨幣が成立しないとすれば、そこにあるものは、単なる孤立的交換（物々交換）の散在であって、一つの総体を形成した流通過程ではないであろう。

単なる二商品の交換過程（ $W_a - W_b$ ）だけを考察すれば、交換の行為自体は

6) 参照、ウルリッヒ・クラウゼ著 高須賀義博監訳『貨幣と抽象的労働』三和書房 1985年。

瞬間的なものにすぎない。物々交換を想定して考えてみるとよいが、自分の商品の買い手をみつけるために要した時間、また、その相手と商品の交換条件のおりあいをつけるために要する時間は、交換行為自体に要する時間の数十倍にもなるであろうが、それらは、経済的な視野に包摂されたものとはいいいがたいであろう。物々交換においては、そもそも取引の相手たりうるか否かが自分の欲する生産物を提供しうるか否かを基準にふりわけられ、また取引の条件（交換比率）も相手の生産物の使用価値に自分がおぼえる欲望によって特殊に規定されているから相互の駆け引きによって確定されなければならないであろう。したがって、いつでも販売可能なものを商品というとなれば——それは、実際には貨幣および貨幣価格の成立なしには不可能であろう——、生産物が商品となるのは、合意が成立し交換が実際におこなわれる瞬間的な過程にすぎない。

貨幣が一旦成立すると、二商品の交換過程は販売と購買の2つの段階に分離する（ $Wa-G \cdot G-Wb$ ）が、それはもはや、孤立した2個人間の取引ではない。流通手段としての貨幣は、二つの取引を仲介することによって、3人の人間を結びつけるが、その貨幣を手にした他の人も同様の取引の連鎖をつくっていくであろう。この連鎖は、分岐しながら社会全体に拡がっていき、他の連鎖と融合しあい、そこに「さまざまな過程のひとつの流れとして表示されるこの過程の全体」としての「流通」が成立する。それは、交換過程が空間的＝社会的拡がりを獲得したものであるが、同時に時間的な連続性の獲得でもあることを確認すべきである。それはたしかに、「第一次的総体」⁷⁾と呼ぶべきものである。

商品は生産者の仕事場で使用価値を獲得するまでは商品ではないし、消費者の手中でも商品であること——交換価値に支配された状態——をやめている。その意味では、商品は生産過程と消費過程のはざま（流過程）に一時的にあらわれる価値的なフローにすぎない。しかし、流通手段としての貨幣は、この過程にいったん登場すれば、そこにとどまりつづけるストックである。財布の中で休んでいる場合でも、それは交換価値を体现することをやめたわけではな

7) 高木孝二郎監訳『経済学批判要綱』大月書店 第I分冊117頁。

い。流通過程に持ち出される商品は、その交換価値を貨幣価格で表示し——それが適切であるかについては調整の要がありうるが——、貨幣をもつ買い手に対してはいつでも販売可能な状態にあるであろう。貨幣という唯一の共通尺度の登場は、生産過程および消費過程における具体的・個別の特異性から経済的価値を解放し、〈経済的時間〉を無個性的な次元として設定させる基礎である。したがって、貨幣的な経済においても、取引相手の探索および交渉に時間がかかることにはわりはないとしても、それは流通過程に包摂された過程であり、経済的な視野の内部にとりこまれたものというべきである。

「商品の形態転換が貨幣の単なる位置転換としてあらわれ、かつ流通運動の継続性がまったく貨幣のがわに帰する。」⁸⁾「商品の使用価値は、それが流通過程から脱落するとともにはじまるが、流通手段としての貨幣の使用価値はそれが流通することそれ自体である。流通のうちでの商品の運動はただ一時的な要因にすぎないが、他方、流通のなかでやすみなくうごきまわることが貨幣の機能となる。」⁹⁾それはいいかえれば、貨幣においてはじめて、フローではなくストックが問題になるということでもある。この流通過程において存在する一定量の貨幣は、その反復的な位置転換によって自分の数倍もの価値の商品をその需要者の手元におくりとどける。したがって、流通過程の時間的側面は、この流通手段としての貨幣のストック量とその流通速度に総括されるひとつの「総体性」をもつことになるであろう。

しかし、再度確認すべきことは、貨幣の流通運動は、背後に社会的分業を置いて登場する諸商品の流通の反映にすぎないということである。「貨幣流通の速度は、商品の姿態変換の速度」である。流通過程にあらわれる個々の商品、あるいはその所有者の視点からみれば、貨幣の出現も、流通過程を構成するものが個々の商品がその需要者にめぐりあう個別的过程であるという事態をなんら変更するものではない。商品は無政府的に生産されているのであるから、商

8) 『経済学批判』126頁。

9) 『経済学批判』128頁。

品が瞬時にその買い手を見つけることはありえないし、時にはそもそも買い手を見つけることがおこるであろう。商品が顧客にめぐりあうのに要する時間は、個別の商品の出来具合、あるいは商品種類、さらには市場の整備度等々によって多様であろうが、貨幣の出現によって短縮されるとはいえ、無視するものにはならないであろう。しかも、商品の供給者の背後にも、需要者の背後にも、具体的・個別的でしかありえない多様な生産過程・生活過程が存在するのであるから、需要と供給は時間のなかでしかあらわれず、またそれらの出現を完全に予測することはできない。流通過程が時間的過程であるのは、まことに当然ながら、それ自体として時間を要する個別過程がさらにまたこうしたより広い現実的時間の進行の中に配置されていることによるのである。

貨幣流通の連続性をこのように理解するならば、流通過程において経過する時間は、外延的には、すでに現実の時間経過と等しいものになっている。そこでは、流通の個々の過程は必ずしも連続的ではなく、貨幣の運動は不断の休止を含む。しかし、反復的運動の過程においてだけでなく、休止期間においても貨幣としての存在を失わないことが、総体としての流通過程の連続性を保証しているのである。したがって、貨幣となる商品は、価値的にも素材的にも時間に耐えるものであることが必要であり、そのような商品はそれ自体として価値の保蔵手段である。したがって、流通過程の時間的構造の認識は、貨幣の現実的存在を承認することであるといつてよい。

C) 流通の時間的構造の中での二つの対応

流通過程は総体としては連続的であるが、個々の過程としては不断の中断可能性を含んでいる。それは基底においては、背後にある生産・消費過程の時間的配置のズレ、販売および購買に必要な時間によるものであるが、さらに商品生産の無政府性によって増幅されている。マルクスが流通手段としての貨幣と区別して「貨幣としての貨幣」として論じた2つの貨幣機能——蓄蔵貨幣と支払手段——は、こうした流通過程の時間的構造に起因する貨幣運動の休止を、

現実の経済過程の中断に直結させないための二つの対応形態を基礎としている。

分業のもとでは、各人は商品へのニーズを確実に持つ ($G-W$ の必須性) にもかかわらず、その前提たる販売過程 ($W-G$) の成功には偶然がつきまとい、しかも時間を要する。販売による貨幣の獲得がおくれても、流通過程を進行させるには、貨幣を予備的に蓄積しておくか、支払時期をずらしてもらうかする以外にはないだろう。第一の対応は、 $W-G$ と $G-W$ のズレを、過去から現在にもちこした現実の貨幣の保有によってカバーしようとするのに対して、第二の対応は、将来の貨幣引渡しの約束 (債務の設定) でこれを克服しようとするのである。

マルクスの文章でこれをみてみよう。

第一の対応：「商品生産の発展とともに、すべての商品生産者は『何ヨリモ先ダツモノ』を確保しなければならなくなる。彼の欲望は不断に更新され、他人の商品を不断に買い入れることを命じるのに、他方では、彼自身の商品の生産と売却とは時間を要するようになり、偶然に依存するようになるからである。」¹⁰⁾

第二の対応：「商品流通の発展とともに、商品の受け渡しとその価格の実現から時間的に分離される関係が発展とともに、商品の受け渡しとその価格の実現から時間的に分離される関係が発展してくる。……〔商品は種類ごとに生産期間に長短があり、またその生産も特定の季節、特定の場所に結びつくことがある。〕……したがって、ある商品所有者は、他の商品所有者が買い手としてあらわれることがある。同一個人の間と同じ取引がつねに繰り返される場合には、商品の販売条件はその生産条件によって規定される。……一方の商品所有者は現存する商品を販売するのだが、他方は貨幣の単なる代表者として、あるいは将来の貨幣の代表者として購買するのである。」¹¹⁾

第一の対応は、現在では貨幣の予備的需要というような概念で表現されてい

10) 向坂逸郎訳『資本論』岩波文庫③ 245-246頁、長谷部文雄訳 青木文庫① 260頁。

11) 『資本論』岩波③ 252頁、青木① 265頁。

るものであろう。それを「蓄蔵貨幣」の基礎規定とみなすことについては、批判がありうる。というのは、マルクスが「貨幣蓄蔵」という場合、それはしばしば、流通過程から画然と区分された富の自己目的な蓄積（たとえば、埋蔵とか工芸品、あるいは守銭奴の金）の表象と結びついていることが多く、ここで指摘されているようなものについては、「流通を停止した銚貨」とか「銚貨準備金」というような別の表現を用いることがあるからである¹²⁾。しかし、「蓄蔵貨幣は、もしそれがたえず流通にもどろうとまちかまえているのでなければ、いまや単なる無用の金属にすぎない。」¹³⁾ 貨幣蓄蔵を流通過程に対して全く外部に位置するもの、あるいは連絡水路をもつものの全く受動的な調整プールのようなもの考えるのは間違いである。そのような把握は、蓄蔵貨幣は貨幣ではない、ということに等しいと思われるからである。「蓄蔵貨幣」——というよりは、価値保蔵手段としての貨幣への需要というべきであろうが——も、立体的に捉えられた流通過程の内部にあるものとみなすべきではないだろうか。私は先に貨幣は流通過程の総体の中でみればストックであると述べたが、諸個人もまた貨幣をストックとして需要するのであり、その量は、彼の取引価値額だけでなく、時間的構造や不確実の度合（の主観的評価）によって左右されるであろう。

第1の対応は、それによって実現される取引（G—W）になんらの変化も与えないが、第2の場合には、事態は複雑になる。商品の流通それ自体はいち早く実現しているのだが、そこには観念的な貨幣（将来の支払約束）が残され、現実の貨幣はそれを消滅＝清算するために後を追うのである。こうした商品の引渡と貨幣の支払の時間的な分離は、支払期間という新たな時間規定をうみだし、その間（支払が完了するまで）買い手は売り手に対して債務を負うことになる。経済関係は単なる財（および貨幣）の交換にとどまるのではなく、時

12) たとえば「蓄蔵貨幣を銚貨準備金と混同してはならない。銚貨準備金はそれ自身、つねに流通内にある貨幣総量の一部分をなすものであるが、蓄蔵貨幣と流通手段のあいだの能動的関係は、この貨幣総量の増減を前提するものである。」『経済学批判』178頁。

13) 『経済学批判』170頁。

間をこえて持続する意思関係をも含むことになるのである。

第2の対応と第1の対応は、一方では静止した貨幣の蓄積、他方では未来を先取りした観念的貨幣という対照的な結果を生む、直接には別個の対応形態である。しかし、同一主体の財布（勘定）のもとでは、この二つは無関係ではありえない。そもそも、信用を与える側に手持資金の余裕がなければ支払を一時猶予してやることはできないし、また、信用を受ける側に約束の時期までに支払を可能にするだけの貨幣が蓄積される見込がなければ、彼は信用を与えないであろう。いや、各人の手元での貨幣ストックの形成自体が、こうした「支払準備金」としての性格をも持つことになる。個別の経済主体は、現実的な貨幣（現金）と観念的な貨幣（債権・債務）の双方を保有することになるが、彼は後者の時間的配分に留意するとともに、生産過程の進行状況や流通過程の一般的状況をもにらみつつ、両者の構成比率（流動性比率）をもコントロールしなければならないのである。流通過程の時間的構造は、第1の対応の意味で経済主体の貨幣準備を規定するだけでなく、第2の対応とも結合して、その貨幣的資産構成（勘定）自体の内部にまではいりこんでいるのである。

D) 流通過程における「資本形式」¹⁴⁾の成立

私達はB)で貨幣の成立によって流通過程が時間的連続性を獲得し、ストックとしての貨幣の流通運動に反映される「第一次的総体」がそこに生まれることをみた。また、C)では、貨幣蓄蔵と支払手段としての貨幣の規定を流通過程の時間的構造への対応として解釈することから、個別主体の貨幣ストック保有の構造をみた。それらは、全体として、流通過程における貨幣のフロー・ス

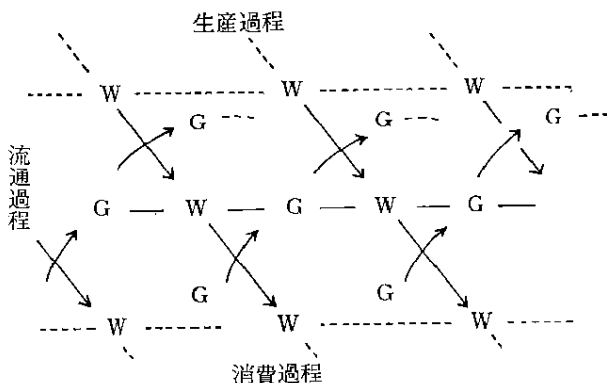
14) 「資本形式」というのはもちろん宇野弘藏氏の用語であるが、私はそれを価値増殖と蓄積を恒常的にめざしまたそれを実現しうる実体ある「資本」としてではなく、貨幣から貨幣に復帰する純粹に形式上のものとして使用している。商品流通の仲介は、購入価格<販売価格でなければおこなわれないであろうが、そのマージンが、零細小売商のように、生活費を含む流通費用をまかなうにすぎない場合もあるであろう。流通過程における主体が資本主義的な実質を備えるためには、やはり、それなりの営業設備、営業資金、そして労働力が必要とされるのである。しかし、流通過程における活動主体を表現するものとしては、G—W—G という「形式」は普遍的である。

トック構造というべきものを形造るであろう。

しかし、流通過程における時間という問題の追求をここで停止することはできない。というのは、この2小節で見てきた時間というものは、貨幣流通が網の目のように分岐・融合しながら社会の全経済活動を覆うことによって生じた外延的な時間、あるいは不断の運動・不断の休止の双方において貨幣が貨幣でありつづけることに依存した受動的な時間というべきものであった。要するに貨幣の成立によって、流通過程が現実の時間的過程の全体に拡がったことを確認したにすぎない。しかし、〈貨幣と時間〉という問題視角を〈資本と時間〉という問題視角に交錯させるには、いま一步を進めなくてはならない。それは、流通の媒介者としての貨幣がその人格化としての商人の姿において能動的な存在に転化すること、つまり $W-G-W$ にとどまらない $G-W-G$ という運動形態の成立を考察に入れること、これがその一步である。

流通過程を時間も費用もかかる現実的過程として把握することは、流通過程の主要担当者としての商人の役割の評価につながるであろう。商品の生産過程（供給）は時間的にも空間的にも、その消費過程（需要）と完全に適合的に接続しているわけではない。そうした供給や需要についての知識も不完全である。等価交換というような抽象的な想定が無意味なそうした現実的な流通過程においては、適切な方式で商品の流通を仲介すれば、安く買って高く販売する（ $G-W-G'$ ）チャンスが普遍的に存在している。そうした利得チャンスを狙って、流通過程の時間と費用の大部分をひきうける商人が出現することによって、流通過程は、時間的にも空間的にも独自の領域として成立するのである。

第1図は、こうした販売のための購買という商人の活動の出現によって、確立した流通過程を示している。 $G-W-G$ という流通の仲介活動がないとすれば、商品が流通過程に登場するのは、生産者から消費者の手中へのただ一回の跳躍の瞬間だけで、流通過程の連続性を体現するのは人の手から手へとわたる貨幣の運動にすぎなかった。しかし、販売のための購買（ $G-W-G$ ）が生じると、この貨幣運動の真中に多様な商品が登場し、流通過程はそれ自体として

第1図 仲介活動 ($G-W-G$) の成立した流通過程

幅を有したものになる。水平軸（時間の進行軸）にそった $G-W-G-W-G$ ……という運動は、商人がそこに彼の財産と人格的活動をそそぎこんだ運動である。図では一人の商人の活動として描かれているが、その背後に相互に複雑な取引をおこなう無数の商人の列を透視的に想像するのがよいであろう。この水平軸の運動によって実現されているのが、左上から右下に進む商品流通と左下から右上に進む貨幣流通である。前者の運動は、流通過程を横切って多様な空間的・時間的配置をもった社会的な生産および消費過程を結合するものであるが、貨幣流通を表現する運動の方は流通過程の内部に無限に伸びるものであり、このような二様の運動の相互依存として B) でスケッチした「第一次的な総体性」が存在するのである。

だが、私達にとって、こうした流通過程の確立以上に重要なことは、この $G-W-G$ という循環を描く運動形態の成立によって、流通過程の時間と費用を包摂する形式——私は、それを「資本形式」とよぶのが適切であると思う——が成立したことである。流通を仲介するこうした活動において、貨幣は将来の還流のために投下されるのであり、そうした意志を體現したものとして「前貸 avances」あるいは「資本 capital」なのである。このような、同一主

体のもとでの同一形態への復帰ということがなければ、回転——時間をその中に包摂した循環——ということは意味をなさない。そして、同一物（貨幣）が時間をへだてて、その量において比較されるとき、 G' と G の差は、その投下——還流の過程に要した時間と費用がそれにより評価される基準になるであろう。

この運動形態は、C) でみた二つの対応を現実的に結合する形態でもある。 $G-W-G$ という商品流通の媒介活動においては、近い将来における販売を見込みうるのでなければ商品を購入することは意味がない。したがって、貨幣の還流の見込みは偶然的なものではなく、また、商品の形をとった資産も存在している。したがって、この運動形態においては、貨幣を予備的に蓄積した主体と将来の貨幣支払約束で購買しようとする主体の間の信用の授受には、現実的な基盤が存在する。こうした視角からみれば、 $G-W-G$ は、 W の姿の影にかくれている $G-G$ という取引の母体である。

さらにまた、個別主体の貨幣保有の構造（勘定）という側面をみると、それは2つの点で発展したものになろう。その第一は、貨幣（現実的貨幣および観念的貨幣）だけでなく商品もが投下した資本＝貨幣価値を体現したものとして資産構成の中に現れるということである。そして第二には、こうした主体の勘定はもはや単なる資産目録ではなく、おなじみのT字型の貸借対照表¹⁵⁾を想起すればわかるように、資本の回転・運用を表示するものになるということである。

15) 八木「資本と時間（Ⅱ）」357頁以下参照。